ホタルのふるさと
横浜瀬上沢

認定特定非営利活動法人
ホタルのふるさと瀬上沢基金
会報　№14
2018．6．1
〒234-0054　横浜市港南区港南台 9-30-31
Tel090-6191-1861/ Fax 045-832-9167
E-mail　segamikikin@gmail.com
ホームページ　http://www.segamikikin.org/
県認証番号；N 協第 1083 号
法人登録番号；0200-05-006727

宅地化して地権者は先祖伝来の土地を守れるでしょうか？

横浜市は、市街化調整区域の線引き権限が県から移譲されたとたん、待っていましたとばかりに瀬上沢を市街化区域に編入しました。樹林地や農地を宅地化すれば 1,000 倍もの固定資産税が取れるからです。地権者還元用地はおよそ 4.4ha、固定資産税は従来の 4 万 4 千円がざっと 4,400 万円になります。

問題は、この税金を地権者がどう払うのでしょうか？　住宅 300 戸の建築費が 60 億円、家賃が月平均 11 万円として年間 3.96 億円の収入。年間支出は、土地固定資産税 0.44 億円、建物固定資産税 0.51 億円、管理費/修繕費 0.396 億円、30 年銀行ローンで 2.5 億円、合計 3.846 億円でほぼトントンになります。入居率 90%になったら地権者は土地も貸家も守ることができません。

東急建設は、建設残土処分場として金をとって谷を埋め、東側の緑地はみどり税で横浜市へ購入させ、大儲けができます。横浜市は、東急建設の負担で舞岡上郷線を 4 車線化、西側の宅地化で固定資産税を大幅アップし、目先の税収増を目論んでいます。

損するのは地権者と市民です。残土処分場として貴重な湿地を埋め立てただけで住宅計画が凍結された三浦市北川湿地の二の舞にならぬよう、これからも活動してまいります。

「瀬上沢」100％保全だからできること

子供たちへの
未来のかたち
どちらがうれしい？

100%のかたちと
70%のかたちと
どちらがいいですか？

本来あったはずの姿で残しておいてほしいものってありますよね。
丸々100%の形を残していることによって力が発揮されることだってあります。
アンパンマンの顔のように

ホタルのふるさと瀬上沢基金は認定 NPO 法人です。寄付金の約 50%が税控除されます
皆様の寄付をトラスト基金（特定資産）として積み立てています。
寄附金控除については当基金までお問合せ下さい。

横浜市への働きかけ・・・・・・一部をご紹介します。

基金では様々な疑問を感じ、市長へ提出してきた質問書の表題です。現在までに 96 通になりました。
紙面右側は市の回答の一つです（市長から直接の回答はなくすべて担当局からの市長名回答です）。
※ HP（http://www.segamikikin.org/）では全文 96 通を掲載しています。

- 谷戸埋立ての危険性について
- 上郷開発による風害について
- 東急建設の都市計画提案について
- 東急建設の不正データ黙認について
- 上郷開発は調整区域のあり方答申と不整合
- 10ha 開発により 20ha の担保は本末転倒
- 学校用地の市街化編入は教育軽視
- 整開保・線引き公聴会全員反対市素案は無効
- 線引き公聴会再度開催要請
- ナショナル・トラスト基金団体の評価を問う
- 上郷開発はバランスを崩す計画
- 神奈川県生物多様性ホットスポットを潰す上郷開発
- 開発地区は駅から 800m は不当表示
- 学校用地の市街化編入は教育軽視
- 東側の瀬上沢一帯は市街化調整区域のまま”は矛盾
- 国土利用計画に反する上郷開発
- 都市のコンパクト化に反する上郷開発
- 都計審議長交替と上郷開発再審議請求の陳情
- 都計審森地議長は利益相反で不適格
- 市整開保は国の方針に逆行
- 緑地の市街化編入は国市の方針に逆行
- 横浜市公聴会の意見無視を問う

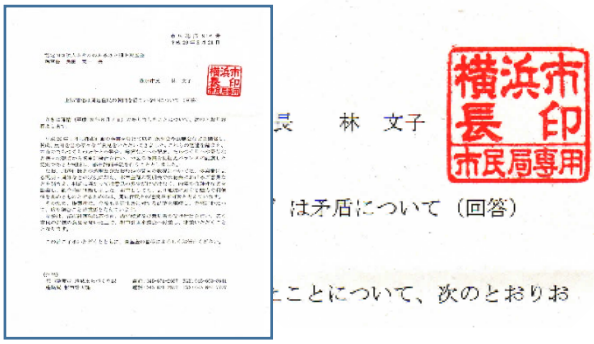
上郷開発は周辺住民の賛同を得ていない（2017 年８月７日）

2017/8/21 付で質問書への回答がありました。

市長回答は「周辺住民の賛同が得られていなくても、提案者が努力している。横浜市が、説明会・公聴会・意見書募集を行った結果、市民意見には合理性が無いと判断した」というものです。

人口減少や温暖化に対する国・県・市の方針にそぐわないばかりか、評価基準を無視している横浜市の方が合理性はあるというのでしょうか？

上郷開発は“誰のため？何の為？”なのでしょうか。↓こんな形で回答がきます



東急建設株主総会で上郷開発問題を質す

2017 年６月 27 日株主総会で、５項目を質しました。

質問１では、東急建設は横浜市の全面買取り提案を拒否し、11.2ha の売却提案したことを繰り返し回答しました。回答通りであれば、横浜市は３割の開発を認め、残った内の約６割をみどり税で買い取る事になります。　これでは、“みどりを守るため”と創設された“みどり税”が“みどりを潰して事業者を守るため”に使われる事になります。

質問５では、開発申請書に“開発を認めなければ樹林地は墓地に転用”などと記載されている事についてです。樹林地の大半は東急建設の所有地です。墓地に転用するのは誰なのでしょうか？

不都合な問題は責任を地元地権者に押し付けるという、事業者の言い訳の一つが露呈したものです。

横浜のみどりを未来につなぐ実行委員会が行った、住民投票請求署名へのご協力ありがとうございました。住民投票実施は、横浜市有権者の 1/50 にあたる６万２千筆以上が必要でしたが、２か月間・区縛りという厳しい条件下で３万６千筆にとどまり、住民投票実施には至りませんでした。

今後も実行委員会は「みどり税の使い方、みどりをどのようの未来につないでいくか」という課題で活動が続きます。基金も**“瀬上沢の良き活用”**を皆さまと共に考えてまいります。

会員の皆様には、なお一層のご協力ご支援をお願いいたします。

～瀬上沢の地名に寄せて～　　**猿田と製鉄の関係**　　水野光彦

紀元７世紀の中ごろから９世紀はじめまで瀬上沢の深田谷戸付近には古代製鉄が栄えた。この遺跡は、舞岡上郷線道路を造るときに発見され、残念ながら現在は土中に埋まっている。この深田遺跡の先、ちょうど三浦半島から延々と続く丘陵の最北端にあたる地点が”猿田谷戸”と呼ばれる地域である。この猿田という名称はちょっとかわっている。

普通に考えれば、動物の猿が多く出現したから、猿田谷戸と言ったのであろうという人が多い。しかし、猿田は猿田彦という神様と関係しているのではないか。古事記や日本書紀の中では、猿田彦は「道案内人」として描かれているが、これは「日本の古い文化体系を持った民」と「日本に新しい文化を持ち込んだ民」が、融合を図っていく過程を、象徴的に神話の形を借り、記したものといわれている。**（製鉄の響き、22 その１３）いう記述とともに、古代新羅では、鉄のことを“サ”、砂鉄のことを”サル“と言ったそうだ。**（「まなほ」編集長　辻井一美さん）。現代韓国語では、鉄は”チョル“と発音するようである。ちなみに”アル“は現代韓国語でも粒の意であり、”アルアルレ“が現在の日本のお菓子である“あられ“の由来である。

また、深田製鉄遺跡東側の山の山腹には明らかに古代日本人とは異なる渡来人の墓と思われる墳墓群が存在する。これらのことから、猿田谷戸の猿田は、渡来人がここで製鉄を開始し、生活していこうと決意して命名したと考えることもできる。

また、浦項(ポハン)にある浦項冷水里新羅碑には、５０３年に新羅で政変があり、多くの鉄の技術者集団が国を追われたとあるそうだ。その人たちは日本海に出、大山を目標として島根県の宍道湖付近に上陸したといわれている。その後　この宍道湖周辺に移り住んだ渡来人の製鉄技術集団は、日本各地に散らばっていったと考えられる。

『続日本紀』には、霊亀２年（７１６）、甲斐、駿河、相模、上総、下総、常陸、下野７国中の高句麗人１７９９人を武蔵国に移して高麗郡（こまのこおり）(現日高市)を設置したと記されている。

だが、深田製鉄遺跡が栄えたのは、７世紀中ごろから９世紀初めであり、この移住前に深田・猿田谷戸付近には渡来人がたどりついていたと思われる。宍道湖付近に上陸した渡来製鉄技術集団が、どのような経路を辿って深田の地へたどりついたのかは、おそらく瀬戸内海経由の海路ではないか。別の経路としては、島根を経由せず日本海の対馬海流(時速 1.8km)にのり、津軽海峡を通り抜け、その後親潮にのり日本の太平洋岸を南下して、深田・猿田まで辿りついたことも考えられる。

現に岩手県には、鉄と関係が深い”虎舞”の伝統が残っている地域が多い。しかし、これらの風習が残っているのは岩手県どまりであり、瀬戸内海経由でたどりついた確率が高い。

私は、以前、猿田谷戸で赤茶けた明らかに鉄分を含むと考えられる泥を採取したことがある。もしかしたら渡来人はこれらの”山砂鉄”を製鉄の原料としたのではないか。しかし、その後の北條佑勝さん（光明寺前住職）のお話や、２００年間も続いた製鉄の原料とするには、山を切り崩した後がないことから、深田・猿田の古代製鉄の原料は七里ガ浜などの”海砂鉄”を使用したと推定される。

深田古代製鉄遺跡からは、鉄を道具に加工する鍛鉄の跡が少ないそうである。しかし、これも全面発掘する前に道路下に埋めてしまったため、それらの遺跡が発見されていないだけかもしれない。

これらの古代歴史ロマンは横浜市と東急建設の１９９０年代そのままの時代遅れの経済発展思考による開発計画により永遠に失われようとしている。郷土にこのような歴史があったこと、それを大切に保護し、後世代に引き継ぐことにこそ人間の営みがあり、これからの時代は、その営みのなかから活力を見出し、経済も持続させていく時代である。本稿は、上郷・猿田地区開発に対する一反論として、猿田と古代製鉄の関係を記した。

※この小論は週刊上田(週刊上田新聞社発行)に「信濃の鉄ものがたり」を２００５年から２００７年に書かれた滝沢きわ子さまと、「まなほ」李寧熙(イ・ヨンヒ)責任編集の編集長であった辻井一美さまからの聞き取りを元に作成しました。辻井一美さまと滝沢きわ子さまには深く感謝します。

ぬりえ「瀬上沢」　過去・現在・未来の　色を付けてみよう

バッタ取りに皆夢中

川の生き物探し

網の中で生まれたよ。
サワガニの赤ちゃん

赤ちゃんたち

第１０回 ホタルのふるさと瀬上沢基金総会　６月 24 日（日）１３時より

港南台地域ケアプラザ（214 ビル１F）ボランティアルーム　※昨年と会場が変わっています

※実施中　ガイドツアー　：随時（HP に掲載、またはご希望の方はご連絡ください）
　　クリーンアップ：偶数月第２日曜日　10 時～12 時　横浜栄高校校門集合

～ 会員・寄付状況 ～　　5/20 現在

正会員：　44 名　法人正会員：１名
JF 会員：40 名　個人賛助：91 名
法人賛助：１名　　計 177 名
寄付者　15,010 名
寄付金額　1,044 万円

～編集後記～

どんなかたちの瀬上沢になるのでしょう。素敵なまちになるように、しがらみに捉われない横浜であってほしいと願っています。世界に誇れる本物の成熟都市の姿が残るといいのですが。（M.F）